

外国人教員と日本人教員の協働による  
大学での英語教育  
—新学部での取り組み—

階戸 陽太

Collaborative Teaching between Foreign Teachers and Japanese  
Teachers in the University: A Challenge in the New Faculty

Yota Shinato

# 外国人教員と日本人教員の協働による 大学での英語教育 —新学部での取り組み—

階戸 陽太\*

Collaborative Teaching between Foreign Teachers and Japanese  
Teachers in the University: A Challenge in the New Faculty

Yota Shinato\*

*Received May 31, 2018*

*Accepted June 15, 2018*

## Abstract

This paper reports that the device of the collaborative teaching between foreign teachers and Japanese teachers in the university leads to the effective teaching English. The writer's university started the new faculty in 2017, which focuses on English proficiency. Students build the foundation of practical English at the first two years. Then to use English, they go to study abroad, or tell their specialty they choose and studied in the area of regional culture and tourism, international relation, or language. This will lead to develop global human material. To realize this aim, English education at this faculty is decided into two parts; the courses for foreign teachers and Japanese teachers. Adding this, pairs of teachers teach same students to share the information of the students and class to make the class effective. This paper aims to propose the effective English education at university though analyzing the interviews of the teachers and questionnaire for students.

## 1. はじめに

本稿は、大学での英語教育を外国人教員と日本人教員の協働によって行うことで、教育効果を高めるための取り組みについてのスタート段階での実践報告である。

筆者が勤務する大学では、2017年度より新しい学部がスタートした。1、2年生で実践的な英語力を身につけ、3、4年生では、身につけた英語力を用いて、海外留学、学生が選んだ領域（文化・観光、国際関係、英語・中国語）から地域発信を行うことで、グローバル人材の育成を目指す学部である。この学部の語学科目としての英語の授業では、外国人教員と日本人教員が担当する授業をすみ分けを行っている。その上で外国人教員と日本人教員が担当する学生を共通させ、授業内容、学生に関する情報交換を行うようにしている。

---

\*国際コミュニケーション学部 Faculty of International Communication

2017年4月から始まった取り組みについて、教員へのインタビューを中心とした考察を通して、スタート段階での検証を行い、より効果的な大学での英語教育について提案を行う。

## 2. 背景

### 2.1 高等学校までの英語教育（学習指導要領）

大学に入学するまでの英語教育について、現行の学習指導要領によって確認すると以下の通りとなる。（下線は筆者）

#### 小学校外国語活動

外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ、親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。（『小学校学習指導要領解説外国語活動編』、p.7）

#### 中学校外国語科（英語）

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基盤を養う。（『中学校学習指導要領解説外国語編』、p.6）

#### 高等学校外国語科（英語）

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う。（『高等学校学習指導要領解説外国語編』、p.8）

現行の学習指導要領では、コミュニケーション能力の育成を軸に、「素地」「基盤」と段階を追ってコミュニケーション能力の養うことを目指して、英語教育が行われていることがわかる。

### 2.2 高等学校までの実態

文部科学省は、2011年に「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」を発表し、中学校3年生で英検3級程度以上の英語力を持つ生徒の割合を30%、高等学校3年生で準2級程度以上の英語力も持つ生徒の割合を30%とした。

一方文部科学省が行った、2016年度の「英語教育実施状況調査」では、中学校3年生で英検3級程度以上の英語力を持つ生徒の割合は18.1%、高等学校3年生で準2級程度以上の英語力も持つ生徒の割合は36.4%としている。中学校段階では、まだ目標に達していないが、高校段階では、現行の学指導要領の成果が現れつつあると言えよう。

## 2.3 本学の実態

新学部の前身に当たる学科<sup>1</sup>の学生の英語力には開きがある。TOEICで900点台を取る学生から、下位の学生は200点台まで学力差がある。しかし、点数は取れないが、英語を話すことへの意欲や聞くことに関しては、ある程度の力を持っていることを授業で感じていた。コミュニケーション能力の育成を目指した高等学校までの英語教育の成果ではないかと考えられる。

新学部の1年生については、4月にプレイメントテストとして、TOEIC Bridge IPを実施した。結果は、前身の学部と似たような傾向であった。

## 3. 国際コミュニケーション学部での英語教育

### 3.1 新学部と英語教育

2017年4月に、それまでの未来創造学部を改組し、国際教養学科を英語教育に特化し、グローバル人材の育成を目指した国際コミュニケーション学部がスタートした。定員は80名で、初年度は81名でスタートした。

この学部での英語教育は、前述した高校までの英語教育の現状と実態を踏まえて、学生の持つ長所を伸ばしながら、苦手なところを補うことで、英語の運用能力を高めることを目的とした。図1が新学部の英語教育のイメージである。

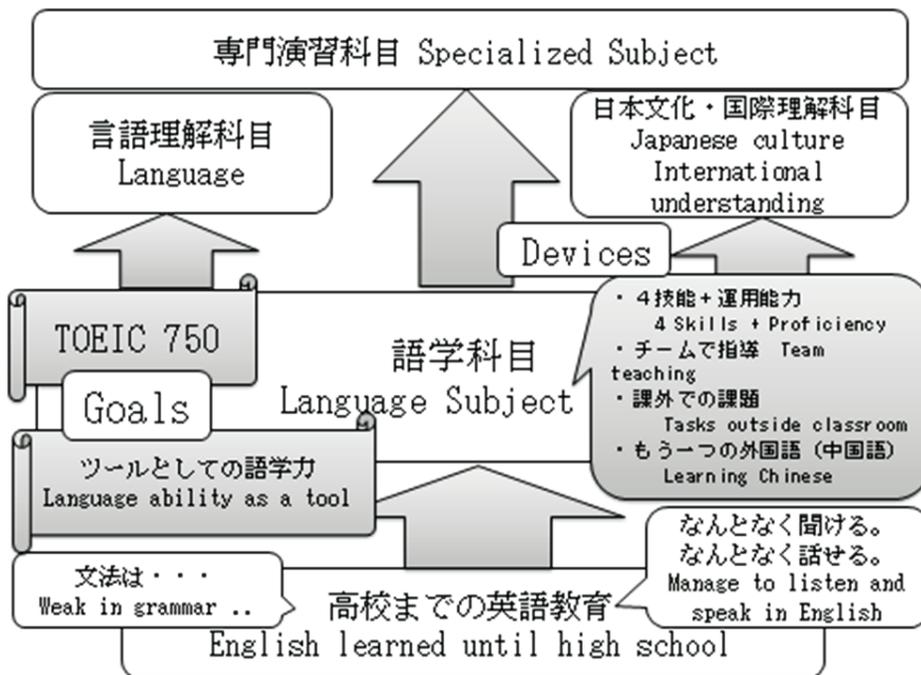


図1 新学部の英語教育のイメージ

到達目標として「ツールとしての語学力」を身に付けること、数値目標として「TOEIC750」の取得を目標とすることを定めた。「ツールとしての語学力」とは、ただ語学力を身に付けるだけでなく、実際に使用するための語学力を意味している。また、「TOEIC750」はそのスコアを目指すことを意味している。

これらの目標に近づけるように、少人数でのクラス編成を行った。初年度は 81 名の 1 年生でスタートしたが、留学生 2 名は日本語を履修するため、79 名でクラス編成を行った。4 月に TOEIC Bridge をプレースメントテストとして実施した。これをもとにクラス編成を行い、1 クラスを 20 名までとし、4 クラスに学生を分けた。2 種類のクラス編成を行い、4 技能に焦点を当てた授業は習熟度別とし、運用面に焦点を当てた授業は混成とした。この理由は、協同学習<sup>2</sup>を取り入れた授業で学生同士の学び合いを促進するためである。

さらに教育効果を高めるために、以下の仕組みを取り入れることとした。

### 3.2 外国人教員と日本人教員による協働

1、2 年次で 6 つの言語科目としての英語を設定した。そのうち 3 つを外国人教員が担当し、残りの 3 つを日本人教員が担当することとした。6 つの科目として、4 技能に関する科目（Listening、Speaking、Reading、Writing）を 4 つと運用に関する科目 2 つ（Presentation & Discussion、Grammar）を設定した。担当教員の構成は、常勤の外国人 2 名、日本人 3 名、非常勤の外国人 3 名、日本人 3 名となっている。図 2 が協働のイメージと科目設定である。

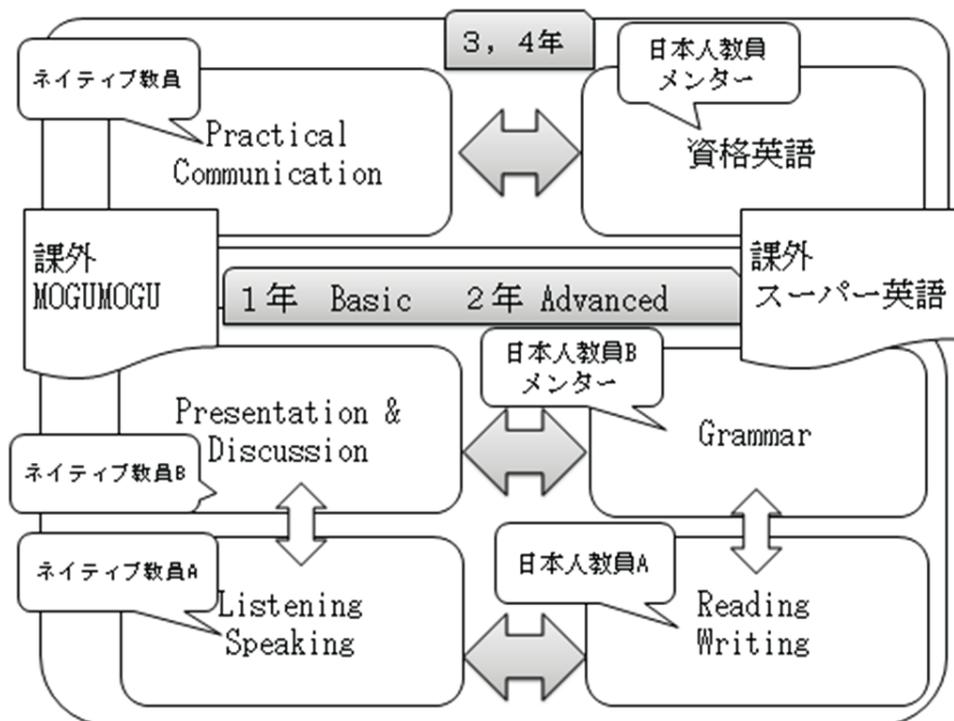


図 2 科目設定と協働のイメージ

4 技能で、外国人教員と日本人教員がペアを組み、同じ学生を担当することとし、学生の情報、授業に関する内容を共有する場を設けることにした。同じように運用に関する科目でも、外国人教員と日本人教員がペアを組み、同じ学生を担当することとした。打合わせを授業後に行いやすいように、時間割に工夫を行った。表 1 が実際の時間割である。学生にとっては 2 時間連続で英語の授業があることになるが、打合わせがしやすいように、ペアを組む相手の授業が同じ日になるようにしてある。

その他に全体での共通理解を図るため、前期は、開始前の 3 月、開始後 1 ヶ月の 5 月、中間の 6 月、前期終了後、成績処理前の 8 月の合計 4 回の合同ミーティングを行った。新学部のコンセプトの共有、学生の情報、授業での課題・評価の情報共有、成績評価の打合わせ、を時期に合わせて行った。

表1 英語科目の時間割

時限	月	火	水	木	金
1			Basic Speaking Basic Writing		Basic Presentation & Discussion
2	Basic Listening Basic Reading		Basic Writing Basic Speaking		
3	Basic Reading Basic Listening	Basic Grammar			
4					
5					

「ツールとしての英語力」を目標に掲げ、「使える英語力」、「英語運用能力」の育成を目指す科目設定を行った。1、2 年生では、語学科目では 4 技能に関する科目 4 つ (Listening、Speaking、Reading、Writing) と運用に関する科目 2 つ (Presentation & Discussion、Grammar) を設定した。Grammar は文字通りの文法を講義式で行うものではなく、アクティビティを通して文法を学ぶという内容で、運用に焦点を当てた科目としている。この後、3、4 年生では、運用に関する科目 2 つに減らす一方、専門科目として、各分野の授業と連動した科目 (「英語で学ぶ国際関係」など) を設定することで、英語を使用する場面を作っている。

## 4. 教員の視点からの検証

### 4.1 教員へのインタビュー

スタート段階での現状を検証するために、教員へのインタビューを行った。新学部のスタートに合わせて、4 月に着任した外国人教員 1 名、日本人教員 1 名を対象とした。この 2 名を選んだ理由は、4 技能、運用面の授業全てを担当していること、また 2 年生以上の旧学部の授業も担当していて、新しい目から比較ができるのではないかと考えたからだ。

インタビューは、全ての授業が終了した 8 月に行った。形式は半構造化インタビューとして、(1) 前期を振り返って、(2) 打合わせについて、(3) 課題・改善、以上 3 点を軸に、話の流れに合わせて質問を加えて行った。

分析は質的分析手法を使って行う。分析の理論的背景として、西條（2007、2008）の構造構成的研究法（SCQRM）を用いた。この考え方では、研究者が研究対象、内容に関することを決定できる。さらに、具体的な分析手法として、グラウンデッド・セオリー・アプローチを援用した。このアプローチには、いくつかの手法、考え方があるが、戈木（2008）を参照した。具体的には、切片化は行わず、内容によってラベリングを行い、その後似たものをカテゴリーとしてまとめた。さらに検討を加え、サブ・カテゴリーを設け、内容の検討を繰り返した。最後に相関図を作成し、まとめとした。

## 4.2 日本人教員

インタビューを行った日本人教員は女性で、アメリカで TESOL を取得し、前任校（工業系の大学）に赴任した。英語を担当するセンターに所属し、教養科目としての英語を担当してきた。全てが統一された中で教えてきた。このため、前期の《全体的な振り返り》として、次のように述べていた。

私、今まで4スキルを、総合的にみる総合英語しか持っていなかったもので、あんまりリーディングだけ、ライティングだけっていう授業を今までもっていなかったもので、どういふうに進めていいのかわからないまま始まってしまって、思うように進められなかった、というのが全体的な感想です。

これを受けて、科目名を挙げ、《迷い》があったことを述べ、具体的に＜アウトプットの不足＞について述べていた。《後期に向けて》、＜文章単位の指導＞を取り入れ、＜学生が話す工夫＞をしたいという考えを述べていた。

### Basic Writing

《迷い》

＜アウトプットの不足＞

どうやっていいか。アウトプットの練習ができていなかった。

《後期に向けて》

＜文章単位の指導＞

文章単位の指導ができなかったもので、これからやりたい。

＜学生が話す工夫＞

学生に話させるように工夫していきたいと思います。

一方、Basic Reading では《成果》として＜取り組み＞を挙げていた。

### Basic Reading

《成果》

＜取り組み＞

リーディングサークルはうまくいったかな。学生はグループが好きなんです。

リーディングサークルとは、学生がグループで英文を1つ挙げ、プレゼンを行うアクティビティである。この教員が以前から取り入れていた活動である。

Basic Grammarでは、《迷い》として〈とっかかりの難しさ〉、《課題》として学生が〈英語で文法説明〉をできなかったことを挙げていた。

#### Basic Grammar

##### 《迷い》

##### 〈とっかかりの難しさ〉

テキストが文法問題なので、何を話題にしていいかわからなかった。とっかかりが難しかった。

##### 《課題》

##### 〈英語で文法説明〉

英語で文法を説明することができていなかったのもう少し、させたいと思います。

次に、外国人教員と日本人教員の協働に関して、振り返りを挙げていた。《成果》として〈学生の情報共有〉を挙げつつも、《課題》として〈学生を伸ばすこと〉〈相手側の理解〉を挙げ、さらに《提案》として〈トピックでの協働〉を提示していた。

##### 《成果》

##### 〈学生の情報共有〉

ミーティングでは、出席状況、学生の様子を話せたと思います。

##### 《課題》

##### 〈学生を伸ばすこと〉

伸ばしていくというところまではできなかったかな。

##### 〈相手側の理解〉

日本人側と外国人側で何をしているのかお互いわかっていない。

##### 《提案》

##### 〈トピックでの協働〉

トピックで協働するのもいいですね。

次に、全体を通した成果と課題・改善点としては、《課題》として学生に〈残るもの〉〈できる実感〉を持たせたいという気持ちを述べ、《成果》として〈プロジェクトを通した評価〉がよかったこと、《改善点》として〈意思統一〉〈課題の調整〉を改善点として挙げていた。

##### 《課題》

##### 〈残るもの〉

テストよりも残るもの。

##### 〈できる実感〉

できるようになったと実感を持てる授業。

##### 《成果》

##### 〈プロジェクトを通した評価〉

プロジェクトを通して成績をつけてもいいのかな。

《改善点》

<意思統一>

何をしているのか把握する必要があります。

<課題の調整>

Reading、 Writing は課題が多くなる。

### 4.3 外国人教員

一方、外国人教員は男性で、日本人教員と同じアメリカの大学でTESOLを取得し、前任校は同じ工業系の大学である。

《全体的な振り返り》として、<良いスタート>が切れたこと、<情報共有>がうまくいったこと、<学生の良さ>を挙げていた。

《全体的な振り返り》

<良いスタート>

4 skill classes are going well, uh.. for..to start. For the first semester, I felt good about it.

<情報共有の成功>

And, uh、 also the one thing that worked well is that the teachers within the same classes for teachers for Listening, Speaking, Reading and Writing, uh, Basic Listening and Basic Speaking...

<学生の良さ>

I was a little bit worried at first, students would be a little bit shy and hesitant to give presentation in the class. Actually, that wasn't true at all. They did actually a good job.

外国人教員間の情報共有はうまくいっていたことがうかがえた。また、この教員の前任校は理系の大学だったため、学生の違いを感じていたようだ。

次に外国人教員と日本人教員の協働に関して、《成果》として<コミュニケーションの良さ>、《課題》として<学生のこと以上>を挙げていた。

《成果》

<コミュニケーション>

I had good communication with my Japanese counterpart.

《課題》

<学生のこと以上>

I talked to him, usually only about ... students having a problem. I didn't discuss anything other than that.

相手方の日本人教員とは、コミュニケーションが取れていた反面、学生の情報交換に留まっていた。

次に《課題》として<評価の公平性>、《改善点》として<教室管理>を挙げていた。

《改善点》

＜評価の公平性＞

I'm worried about consistent grading. Fairness in grading.

＜教室管理＞

Stephanie and I keep the same syllabus and same rules, but I don't know the part-time teachers.

ミーティングで意思統一を図ろうとしたが、統一性という面では充分ではなかったことがうかがえる。

## 5. 考察

### 5.1 成果と課題

ペアを組んだ教員同士、また全体でのミーティングを取り入れたことで、＜学生の情報共有＞が図れた。相手方の教員と＜コミュニケーション＞が取れ、＜情報共有の成功＞が図られ、＜良いスタート＞が切れたと言えよう。また、授業内での＜取り組み＞もうまく機能したものがあつた。評価という観点でも＜プロジェクトを通した評価＞がよかつたと言える。初年度前期の成績評価において、英語科目6つ（各科目4クラス）の不合格者は4名に留まつた。学生の情報交換を行うことで、休んだ学生に対して、早めに対応ができた。また、プロジェクトによって課題への意識付けを行うことができた。

しかし、《課題》として、日本人教員は自身の授業を振り返り、＜学生を伸ばすこと＞ができていなかつたとし、何か＜残るもの＞を授業で行い、＜できる実感＞を持てる授業を挙げていた。具体的に＜英語で文法説明＞を取り入れたいとしていた。この要因には、日本人教員にとって初めての授業で《迷い》があつたからだと推察される。

一方、《改善点》として日本人教員は＜意思統一＞＜課題の調整＞を挙げ、＜評価の公平性＞＜教室管理＞を挙げていた。これらは全て、横の調整、つまり、科目内での打合わせ、日本人教員間の打合わせ、外国人教員間の打合わせが必要であることを示している。

### 5.2 学生へのアンケート

ここまでの考察を裏付けるために、学生へのアンケート結果を見ることにする。このアンケートは、前期の半ばに、外国人教員の一人がスマートフォンを使用して行われた。

アンケートは、6月17日の授業内に提示された。質問は、4技能と運用面に分けて設定され、選択式の設問と記述式の設問で構成され、回答数は73であった。この結果を用いながら考察を行う。

図3は満足度を尋ねた結果である。項目は、テキスト、授業内の活動、小テスト・テスト、課題、プレゼンテーション・プロジェクト、eラーニングについて、4件法で尋ねた。

「授業内での活動」が最も高い値を示している。「プレゼンテーション・プロジェクト」がその次に高い値を示している。これらのことは、ペアを組んだ教員同士、また全体でのミーティングを取り入れたことで、＜学生の情報共有＞が図れた。相手方の教員と＜コミュニケーション＞が取れ、＜情報共有の成功＞が図られたと考えられる。＜良いスタート＞が切れたことを示している。

一方、「課題」「eラーニング」が低い値を示している。eラーニングは、課外で行う Basic Grammar の課題の一部としている。毎週の課題と、取り組みの結果で加算されるマイルで、評価の一部にしている。それぞれの授業で課題が課されているため、量が増える時期もあった。自由記述にも「課題を減らしてほしい」という声があった。このことは、日本人教員が《改善点》として〈意思統一〉〈課題の調整〉を挙げていたように、横の調整、つまり、科目内での打合わせ、日本人教員間の打合わせ、外国人教員間の打合わせが必要であることを示していると言えよう。

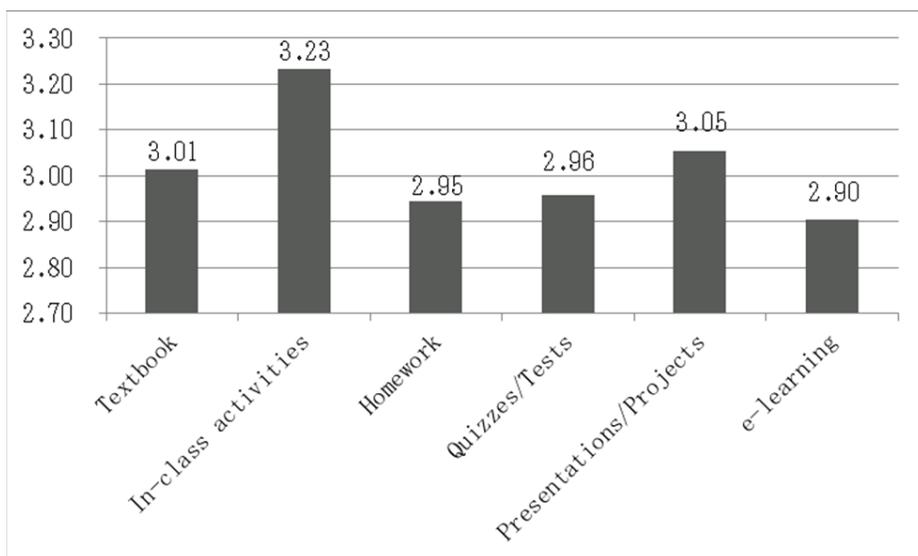


図3 満足度（4件法）

## 6. まとめ

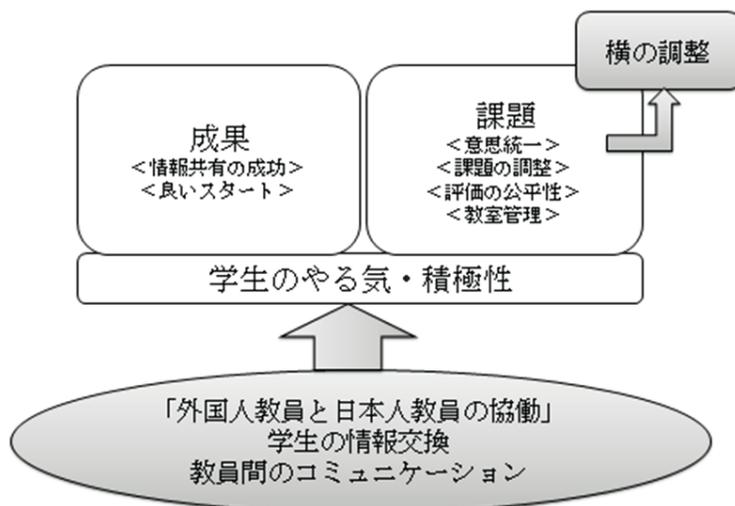


図4 外国人教員と日本人教員の協働による英語教育の成果と課題

図4は、スタート段階ではあるが、外国人教員と日本人教員の協働による英語教育の成果と課題をまとめたものである。情報共有の成功により、学生の良さ、積極性に作用して、良いスタートが切れたと考える。しかし、課題として、横の調整が浮かび上がった。後期は、全体でのミーティングよりも、個別の打合わせを行うようにした。

前期の期末試験では、テストによる評価は行わず、課題・プロジェクトによる評価を行った。後期では、TOEIC IPを受験する。数値的な考察を実施し、外国人教員と日本人教員の協働による英語教育をさらによいものにしていきたい。

#### 注

- 1 前身は国際教養学科で、同じようにグローバル人材の育成を目指していたが、語学に弱みがあった。
- 2 協同学習は、4人一組のグループを作り、各自に役割を持たせ、学び合いを行う学習である。

#### 引用文献

文部科学省 (2008a). 『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』東京：東洋館出版社.

文部科学省 (2008b). 『中学校学習指導要領解説 外国語編』東京：開隆堂.

文部科学省 (2010). 『高等学校学習指導要領解説 外国語編』東京：開隆堂.

文部科学省 (2011). 「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」

[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2011/07/13/1308401\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/07/13/1308401_1.pdf)

文部科学省 (2016). 「英語教育実施状況調査」

[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2017/04/07/1384236\\_01\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2017/04/07/1384236_01_1.pdf)